

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25244017

研究課題名(和文) コーパスに基づく談話の結束性の研究

研究課題名(英文) Study on Discourse Cohesiveness based on Multilingual Corpora

研究代表者

峰岸 真琴 (Minegishi, Makoto)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：20183965

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、言語類型論的な観点から、アジアとヨーロッパの11の言語(中国語、タイ語、ラオス語、ビルマ語、インドネシア語、マレーシア語、タガログ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ドイツ語)について、会話を中心とした話しことばの結束性および主題化がどのような形で現れるかについての研究を行った。本研究は、1. 話しことばの文字コーパスデータの国際的共同研究、2. 談話の主題と結束性に関する言語学的な分析研究、3. 構築されたデータの外国語教育への応用研究の3つから成り立っている。その成果は国際ワークショップ、学会発表を中心に発表され、また具体的な言語教材の開発に役立てられている。

研究成果の概要(英文)：The research project attempted to analyze discourse cohesiveness and topicalization in eleven Asian and European languages: Chinese, Thai, Lao, Burmese, Indonesian, Malaysian, Tagalog, French, German, Spanish, Portuguese. The project consists of three sub-projects. (1) We recorded, and transliterated conversations of these languages with appropriate annotation to make corpus database. (2) Using the database, we have analyzed topic markers and grammatical forms enforcing cohesiveness, whose results were published in academic journals. Some of the results were also used to compile foreign language textbooks.

研究分野：言語学 (言語類型論, 東南アジア言語学)

キーワード：談話分析 結束性 主題化

1. 研究開始当初の背景

1980年代以来、様々な言語で書きことばを中心とする大規模な言語コーパスが構築されはじめた。さらに話し言葉コーパスの構築とその研究も行われるようになり、この流れを受けて言語研究においても言語コーパスを利用したコーパス言語学が隆盛となった。その結果、従来の作例および小規模な事例を中心とした言語研究には見られない、「語り、会話」など、複数の文が構成するテキスト(談話)に基づく言語運用の分析が可能となった。

本課題研究の代表者・分担者は、第一に、話しことば、書きことばコーパスに代表される言語運用の実証的研究とその理論的深化を図ること、第二に、言語運用の研究成果を外国語教育に応用することにより、言語教育法の新たな展開を図ること、この2点を目的とする研究が今後ますます重要になると考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究では、アジアの言語のうち中国語、タイ語、ラオス語、ビルマ語、インドネシア語、マレーシア語、タガログ語を、ヨーロッパの言語のうちフランス語、スペイン語、ポルトガル語、ドイツ語を取り上げる。これらの言語は主題卓立性あるいは主語卓立性、Pro-drop (zero anaphora)、ヴォイスの現れについて多様な言語である。

本申請研究課題の具体的なテーマとしては、主として以下の3つの問題を取り上げる。

(1) 主題 (topic) の機能的分析：談話においてどのような要素が主題として取り上げられるか、主題の文構成上の役割が、ヴォイスや文中の補語、付加詞との文法関係にどのように反映するか。

(2) 談話の結束性の分析：文脈・情報構造によって話し手、聞き手の間で了解可能な補語、付加詞などの文構成要素はどのように「省略」可能か、あるいは不可能なのか。

(3) 機能語の談話機能：トピックの一貫性、談話の結束性は、代名詞、指示詞、冠詞などの照応システムや接続詞などの機能語によってどのように維持されるのか。

本申請研究課題の第二の目的は、言語運用の研究成果を外国語教育に応用することにより、言語教育法の新たな展開を図ることであるが、上に述べたように、主題および談話の結束性に関する「談話の視点」からの研究は、未だ基礎研究の段階にある。従って研究成果の応用としての電子辞典あるいは教材の開発を期間内に作成することを目指すのではなく、本研究では談話機能に関する情報を取り入れた基本動詞などについてのデータベースを構築し、そのweb上での公開を目指す。

3. 研究の方法

本研究では、アジア諸言語研究班とヨーロッパ諸言語研究班とが緊密な連携をとりつつ、研究を遂行する。本研究は主題を中心と

した談話の結束性を分析するための(1)話しことばのコーパス化研究、(2)主題と基本動詞を中心とした文構造の研究、(3)基本動詞を中心とした語彙データベースの作成の3つの研究からなる。(1)話しことばコーパス化研究は、海外の大学・高等研究機関と共同で行う。(2)の文構造の研究は、談話の分析を通じて、基本動詞とその主題、補語のあり方、談話のトピックの継続性、結束性に機能語の果たす役割についての研究を行う。基本動詞の談話における出現環境の分析の具体的な応用として、(3)基本語彙を中心としたデータベースの開発を行う。

4. 研究成果

(1) 話しことばのコーパス化研究

ヨーロッパ諸言語ではさまざまな書きことばコーパス構築が進められてきた、アジア諸言語では、中国語に大規模な書きことばコーパスの蓄積があり、次いでタイ語にもナショナルコーパスがある。しかし、その他の言語では国家レベルでのコーパス構築は進んでいない。またコーパスデータの蓄積やインターネットを通じてのデータ取得の可能性、電子辞書の整備状況についてもさまざまな段階にある。

一般に話しことばコーパス構築はどの言語についても書きことばに比べればわずかな蓄積しかない。本研究では、海外教育・研究機関と共同で、自由会話のビデオ撮影あるいは録音を行い、さらに映画やテレビ番組なども含む音声情報を文字起こししてデータ化を行った。(中国語、タイ語、ラオス語、ビルマ語、タガログ語、マレーシア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語諸方言など)

アジアとヨーロッパの諸言語には、言語の形態統語的な特徴だけでなく、書記体系にもさまざまな違いがある。このため、文字データの作成方法については、敢えて統一的方法を採用せず、それぞれの言語に最適なデータ形式を用いることにした。例えば、分かち書きをしない言語(タイ語、ラオス語)については、必要に応じて文や単語に区切るなどの前処理を行った。

書きことばを含め、コーパスデータ構築の蓄積が乏しい言語も存在する。例えばラオス語については、映画だけでなく、現代文学(小説)の文字化を行った。インドネシアについては、主要な新聞である『コンパス(Kompas)』紙につき、2004年のほぼ1年間のウェブ版記事の本文をコーパスとして、分析を行うことができるようにした。

(2) 主題と基本動詞を中心とした文構造の研究

本研究の共通の研究目標は、アジアとヨーロッパの諸言語について、主題と談話の結束性、機能語の談話機能が、どのように現れるか、その多様性を明らかにすることである。例えば、言語によっては日本語の「は」に相当する主題標識を用いる、主題を表現する慣用的な句を用いる(日本語の「～について言

うと」に相当する),あるいは統語的に語順を変更する,あるいはこれらを組み合わせたり,様々に使い分けたりする,といった多様性がある。

まず声調言語であるタイ語の分析例を例に挙げる。話しことばの文字起こしの分析によれば,タイ語の主題は,発話上のまとまりである音声的句の末尾に現れる句末助詞として表現されること,それらは [na, nia, na. .] などのさまざまな分節音の変異として現れるとともに,声調の面でも句全体の音調を表現する変異を伴うことが観察された。タイ語の書きことばでは,これら句末助詞が主題を表すために用いられることはほとんどない。また,上記の句末助詞の音声的変異は,タイ語の書記体系を用いては表すことができず,音声記号を使うことで初めて表すことができる。句末助詞には極めて沢山の使用例が見いだされたが,従来開発されてきた書きことば中心のコーパスにはほとんど現れることがないため,文字と音声とを対照しつつ分析を行うためのデータベースの有効性が改めて確認された。【学会発表1】

以下では,さらに個別の言語についての主な分析の結果を紹介する。

中国語では,統語的制約により,語り手の視点の固定化とそれに依存した主題の省略が困難なこと,それに替えて,人称代名詞の使用により談話の結束性を維持することが明らかになった。【論文1,16】

ラオス語については,機能語/nám/(「取る,つかむ」を意味する動詞の文法化したもの)のさまざまな統語的ふるまいの分析から,/nám/が「話し手による事態の共有化」という捉え方を示すことが明らかになった。【発表16】

インドネシア語では,機能辞の-lah および -kah のコーパス分析により,これらが情報構造上の「題述」機能を持つことが明らかになった。【論文2】

古典マレー語のコーパス分析からは,動作主が動詞の接語と付加詞の両方により標示される「ハイブリッド型 di-受動文」などについて他の型の di-受動文とその頻度,動作主の定性・特定性を調べた結果,前者では,動作主が特定または定であり,指示性が高いことが明らかになった。【発表4,38】

タガログ語については,疑問詞 ano「何」を分析し,これが構文によって単なる疑問標識だけでなく,驚きや同意・不同意を表現する標識になることを明らかにしたほか,pa-を始めとする接続表現の文法的・意味的性質を明らかにした。さらに,非声調言語であるタガログ語では焦点とプロソディーにほとんど相関がないことを明らかにした。【発表7,33】

ポルトガル語と隣接するリオドノール語などの諸言語のコーパス化からは,これらの言語の歴史的,地域的変異が明らかになった。【論文7,学会発表24】

スペイン語ではアンダルシアの地域方言の録音・分析やスペイン語と日本語との二言語使用者の自然発話のデータ収集と分析を行い,日本在住スペイン語話者の会話では,話者間で結束性が維持される場合に,叙法は維持されるのに,時制の一致が起きない等の興味深い現象が観察された。【発表10】

ドイツ語コーパスの分析からは,従来,定形動詞第2位(V2)を基盤とするドイツ語の語順は基本的に情報構造(テーマ レーマ)を反映しているとされてきたが,V2こそ文の構造を平叙文独特の情報構造から解き放ち,平叙文以外のものも含めたムードの一元的表示を可能にしていることが明らかになり,さらに情報構造の結束性の表現が文構造の論理性と反比例するかたちで動機づけられている可能性が示唆された。【論文5,発表5,6】

このほか,コーパスの共同研究を推進するために,平成27年度には英国から2名の専門家を招聘してワークショップを2回開催した。いずれも具体的な言語についてのコーパス作りとその分析に関する研究の最先端情報を共有するために有益であった。

(3) 基本動詞を中心とした語彙データベースの作成

(1)の実施内容と(2)の主な研究成果から明らかかなように,本研究課題の主題と談話の結束性の各言語における現れ方は,句末助詞の多様な音声的変異(タイ語),動詞から文法化した機能語(ラオス語),疑問詞(タガログ語),機能辞(マレー語,インドネシア語),語順(ドイツ語)といったように,研究企画当初の予想を遙かに超えた多様な現れ方をすることが,研究の進展につれて次第に明らかになり,当初開発を計画していたような共通の基本動詞のデータベースは,かえって談話データから切り離された「理念的な動詞構造」を表すようなものになってしまうのではないかと危惧されるようになった。このためデータベースについては,共通の基本動詞データベースではなく,それぞれの話しことばコーパスを,各言語の特性と研究手法に最適な形で多様なアノテーションを付加したデータベースの構築研究へと軌道修正した。

フランス語の学習者コーパスの構築と分析の成果が教育法の開発に寄与していることから分かるように【論文4,11,13,学会発表20,21,22,23】,話しことばコーパス分析の研究成果は,言語ごとの教材を刊行するために活用され,これが諸言語の話しことばコーパス開発をさらに発展させるための強い動機付けとなっている。【発表34,37,図書1,2,3,4,5】

5. 主な発表論文等

(研究代表者,研究分担者及び連携研究者には下線)以下では,紙面の都合上,主な成果物だけを掲げてある。

〔雑誌論文〕(計20件)

- 1.加藤晴子「日中対訳小説に見る受身形の使用状況と視点の関係」、『東京外国語大学論集』第92号,2016年,pp.65-82,査読あり
2. FURIHATA, Masashi. “On the Syntactic Function of Particles -lah and -kah in Indonesian Based on a Descriptive Analysis”, in Buku Kumpulan Makalah Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia (KIMLI) 2016. Denpasar: Masyarakat Linguistik Indonesia & Universitas Udayana. pp.257-259.査読あり.
- 3.野元裕樹、アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー「マレーシア語の焦点表現と名詞述語文」 語学研究所論集 21 東京外国語大学.171~189. 2016 査読有
- 4.Sylvain Detey, Isabelle Racine, Yuji Kawaguchi, Françoise Zay, “38. Variations among non-native speakers The InterPhonology of Contemporary French”, 2016, Varieties of Spoken French, Oxford University Press, 491-502. 査読有.
- 5.Yasuhiro Fujinawa (2016): “Konjunktiv der Höflichkeit aus Sicht der kontrastiven Linguistik des Deutschen und des Japanischen”, in: Teruaki Takahashi, Yoshito Takahashi & Tilman Borsche (eds.), Japanisch-deutsche Diskurse zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphänomenen, Paderborn: Wilhelm Fink, pp.207-216. [査読あり]
- 6.Nagaya, Naonori. Searching for insubordination: An analysis of *læbo* in Lamaholot, NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia, 59 巻, 33--45, 2015 年 査読有.
- 7.黒澤直俊, 「アストゥリアス語口語コーパスの試みとその分析」, 『東京外国語大学論集』, 査読あり, 第92号, 2016年, 83-116 ページ, 謝辞.
- 8.トゥザライン、岡野賢二 (2016) 「情報構造と名詞述語文」ピルマ語データ」 語研論集 21 号 pp.133-139、東京外国語大学.査読有.
- 9.Nagaya, Naonori. Perfect in Tagalog. Southeast Asian Studies TUFFS, 査読有. 21, 2016, 1-14.
- 10.野元裕樹、アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー. 2015. マレーシア語の連用修飾的複文. 『語学研究所論集 20』, 253-276. 東京外国語大学. 査読有
- 11.Kawaguchi, Yuji. Sylvain Detey, Nori Kondo, Yuji Kawaguchi. La liaison chez les apprenants japonophones avancés de FLE: étude sur corpus de parole lue et influence de l'expérience linguistique. Bulletin suisse de linguistique appliquée. Vol.102, 123-145. 2015, 査読有.
- 12.Kawakami, Shigenobu. *Debí vs. deví*, 『スペイン語学研究』30, 65-79, 査読有.
- 2015.8
- 13.Sylvain Detey, Isabelle Racine, Julien Eychenne, Yuji Kawaguchi. Corpus-based L2 phonological data and semi-automatic perceptual analysis: the case of nasal vowels produced by beginner Japanese learners of French. Interspeech 2014 査読有. 2014 pp. 539-542
- 14.黒澤直俊 データ:「他動性」ポルトガル語・アストゥリアス語、 『語学研究所論集 第19号』, 229-243 ページ、査読有.東京外国語大学. 2014年10月
- 15.Soh, Hooi Ling and Hiroki Nomoto. 2015. Degree achievements, telicity and the verbal prefix *meN-* in Malay. Journal of Linguistics 51(1): 147-183. 査読有.
- 16.加藤晴子「日中対訳小説にみる作者の作中人物への介入度」, 『東京外国語大学論集』, 査読有, 第92号, 2016年, pp.99-109
- 17.Nagaya, Naonori. 2014. Notes on Stand-Alone Yung-Nominalizations in Tagalog. Tokyo University Linguistic Papers 35: 177-186. 査読有.
- 18.長屋尚典. 2014. タガログ語の措定文と指定文. 東京外国語大学論集 88: 117-143. 査読有.
- 19.Nagaya, Naonori. 2013. Voice and grammatical relations in Lamaholot of eastern Indonesia. Alexander Adelaar (ed.), More on voice in languages of Indonesia. NUSA 54:85-119
- 20.黒沢直俊. 2013. 「前置詞に見るイベリア半島西部の時間と空間」ロマンス語研究 46号, pp.27-31, 査読有. 日本ロマンス語学会, 2013年5月 [学会発表](計38件)
- 1.Bussaba Banchongmanee and Makoto Minegishi On developing Thai spoken corpus for analyzing discourse cohesion'. National conference "Humanities: realities and power of dreams" (2016/11/14-15, チェンマイ大学)
- 2.加藤晴子「受動表現と能動表現の転換からみる叙述の視点」, 第八屆漢日对比语言学研讨会, 2016年8月21日, 延邊大学
- 3.Suzuki, Reiko 'A Study of /nám/ in Lao', 5th International Conference on Lao Studies, Center for Lao Studies, 2016.7.8., Thammasat University.
- 4.野元裕樹. 受動文の接語重複分析再考: 古典マレー語の di-受動文 日本言語学会第152回大会 2016.6.25 慶應義塾大学 査読有
- 5.藤縄康弘「主語と文域 二重判断/単純判断の視点から」日本独文学会 2016年度秋季研究発表会 2016.10.22. 関西大学. 査読有.
- 6.Yasuhiro Fujinawa: “Subjekt, Vorfeld und Satzmodus – mit besonderer Berücksichtigung von Imperativ- und Optativsätzen”, 日本独文学会 第44回語

学ゼミナール 2016.8.31. 多磨永山情報教育センター. 査読有.

7. 長屋尚典. タガログ語のリンカー並行事態構文と節連結, 日本語学会第 153 回大会, 国内会議, 日本語学会, 口頭(一般), 福岡大学, 2016 年

8. Nagaya, Naonori. Grammaticalization of the verb ə~ʔə~ 'make' in Lamaholot, The 26th Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, Manila, 2016 年

9. 黒澤直俊, 「アストゥリアス語の口語コーパスとその分析」, 日本ロマンス語学会第 54 回大会, 2016(平成 28)年 5 月 22 日, 九州大学.

10. Kawakami, Shigenobu. El español en Japón: construyendo un corpus (日本におけるスペイン語: コーパス作成の試み) 単著 査読無. 2016/11/26 東京スペイン語学研究会

11. 長屋尚典. タガログ語の naka-結果状態構文, 第 150 回日本語学会, 2015 年 6 月 20-21 日, 大東文化大学.

12. Nagaya, Naonori. 2015. Possession and nominalization in Lamaholot, Thirteenth International Conference on Austronesian Linguistics, July 18-23, 2015, Academia Sinica, Taipei, Taiwan.

13. Nagaya, Naonori. 2015. Affectedness and volitionality: The case of Tagalog, Affectedness Workshop 2015: Verb Classes and the Scale of Change in Affected Arguments, August 13-14, 2015, Nanyang Technological University, Singapore.

14. Nagaya, Naonori. 2016. The Tagalog an 'what': From interrogative to discourse marker. Discourse Markers and Discourse Connectives in Several Languages, Institute of Language Research, January 13, 2016, Tokyo University of Foreign Studies.

15. Nagaya, Naonori & Hyun Kyung Hwang. 2016. Focus and prosody in Tagalog: A preliminary analysis. The third International Workshop on Information Structure in Austronesian Languages, February 18-20, 2016, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, Fuchu, Japan.

16. SUZUKI, Reiko 'A study of "nam" and "kap" in Lao', 6th Conference on friendship studies between Lao and Thai" 2015.9.12. National University of Laos

17. Furihata, Masashi. "Particles teh and mah as Topic Markers in Sundanese", The Fifth International Symposium on the Languages of Java (Isloj5). Universitas Pendidikan Indonesia, Bandung, West Java, Indonesia. 6-7 June 2015.

18. Nomoto, Hiroki. The development of the passive in Balinese. The Fifth International Symposium on the Languages

of Java (ISLOJ). 2015 年 6 月 6-7 日. インドネシア教育大学.

19. Nomoto, Hiroki. A comparative study of the development of the passive in Balinese and Malay. The 10th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (TEAL). 2015 年 6 月 13-14 日. 東京外国語大学.

20. Yuji Kawaguchi Quelques partons prosodiques chez les apprenants japonais du francais Workshop Characteriser le francais parle par les apprenants japonais de FLE : corpus et questions methodologiques, Waseda University (SILS) 2016.1.14 早稲田大学.

21. Yuji Kawaguchi Deux programmes de la TUFs: Corpus du francais parle, Modules de langue 招聘教授による講演 パリ第 10 大学-Modyco 2015.9.25

22. Yuji Kawaguchi Utilite de la linguistique de corpus et de la statistique: Exemples d'application a des textes francais et japonais 招聘教授による講演. パリ第 10 大学-Modyco 2015.9.22.

23. Sylvain Detey, Yuji Kawaguchi. A phonological learner corpus of L2 French in Japan: from compilation to pedagogical use. The 3rd International Workshop on Advanced Learning Sciences. 2015.8.2 東外大 AA 研.

24. 黒澤直俊, 「ポルトガル語古文獻における所有表現 アストゥリアス語との対比から」, 日本ロマンス語学会第 53 回大会, 2015(平成 27)年 5 月 23 日, 東京外国語大学.

25. 藤縄康弘 「判断文 現象文とドイツ語文法」, ドイツ文法理論研究会 2015 年秋の研究発表会, 2015 年 10 月 4 日, 鹿児島大学.

加藤晴子 叙述タイプ別指示, 人称, 移動の中日対照 第七屆漢日対比語言学研討会. 2015 年 8 月 20 日. 上海外国語大学.

26. Hisae Akihiro, Yuji Kawaguchi. Présentation du corpus oral en français de TUFs et son application pour l'analyse linguistique. Workshop «Linguistique de corpus et français parlé» 2014//11/6. 早稲田大学

27. 藤縄康弘 「haben における目的語の定・不定と項構造」, ドイツ言語理論研究会, 2014 年 8 月 2 日, 東京大学・駒場キャンパス.

28. 黒澤直俊 sempre a tive de meu. : 所有の一表現 de meu (/ teu / seu...) について, 日本ポルトガル・ブラジル学会 2014 年度大会(京都外国語大学). 2014.10.11.

29. Suzuki, Reiko 'Functional words in Lao' " 5th Conference on friendship studies between Lao and Thai" 2014.9.20. National University of Laos.

30. Nomoto, Hiroki. A compositional analysis of Malay anaphoric expressions. The 18th International Symposium on Malay / Indonesian Linguistics (ISMIL). 2015.6.13-15. イタリア、ナポリ東洋大学.

31. 加藤晴子「从情态副词上考察作者与作品中人物的关系」, 第六届汉日对比语言学研讨会, 2014.8.21.中国人民大学.

32. Nagaya, Naonori. 2014. "Demonstratives and directionals in Lamaholot". Seventh Austronesian and Papuan Languages and Linguistics conference, SOAS, London, U.K., May 16-17, 2014.

33. Nagaya, Naonori. "Pragmatic functions of ano 'what' in Tagalog". Second International Conference on the American Pragmatics Association, UCLA, Los Angeles, USA, October 17-19, 2014.

34. 野元裕樹「マレーシア語教育と言語コーパス」. 外国語教育学会 2013 年度シンポジウム「外国語教育と言語コーパス」. 2014.3.2. 東京外国語大学.

35. 長屋尚典. 2013. タガログ語の動詞接辞 ma- の多義性: 自発、意図成就、可能、受身. 日本言語学会第 147 回大会, 神戸市外国語大学, 神戸, 2013.11.23-24.

36. Selim Yilmaz, Yuji Kawaguchi: Le corpus oral Marmara pour le projet IPFC : le cas des apprenants turcs. IPFC2013-Paris, 2013.12.9. 大学都市ノルウェー館 (パリ).

37. Minegishi, Makoto Semantic Characteristics of Thai Basic Verbs. The 23rd Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society (SEALS XXIII), Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, May 29-31, 2013.

38. Nomoto, Hiroki. On the person restriction on the agents in di-passives in Malay. The 23rd Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society (SEALS). 2013.5.29-31. タイ、チュラロンコン大学.
〔図書〕(計 5 件)

1. 峰岸真琴, 鈴木玲子, 岡野賢二, 他. 2017. 東南アジア諸言語研究会 (編), 『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』222pp. 慶應義塾大学言語文化研究所.

2. 野元裕樹 2016 年 『ポータブル日マレー英・マレー日英辞典』, 1152pp. 三修社 東京

3. 川口裕司, 『初級フランス語のすべて』, 2016, IBC パブリッシング, 189pp.

4. 川上茂信 『スペイン語学概論』共著 2015.6.30. くろしお出版

5. 降幡正志. 2014. 『インドネシア語のしくみ《新版》』. 白水社. 146pp.

6. 研究組織

(1) 研究代表者
峰岸 真琴 (MINEGISHI, Makoto)
東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化

研究所・教授
研究者番号: 20183965

(2) 研究分担者

川口 裕司 (KAWAGUCHI, Yuji)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 20204703

黒澤 直俊 (KUROSAWA, Naotoshi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 80195586

加藤 晴子 (KATO, Haruko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 90275818

藤縄 康弘 (FUJINAWA, Yasuhiro)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号: 60253291

川上 茂信 (KAWAKAMI, Shigenobu)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 40214598

鈴木 玲子 (SUZUKI, Reiko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 40282777

岡野 賢二 (OKANO, Kenji)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号: 60376829

降幡 正志 (FURIHATA, Masashi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号: 40323729

野元 裕樹 (NOMOTO, Hiroki)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師
研究者番号: 10589245

長屋 尚典 (NAGAYA, Naonori)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師
研究者番号: 20625727